

岩手医科大学歯学会第11回総会抄録

日時：昭和60年11月30日（土）午前9時25分

会場：岩手医科大学歯学部講堂

演題1. 低年齢児に発生した先行乳歯根尖病巣による
永久歯歯胚の位置異常○小野 玲子, 野坂 久美子, 守口 修,
山田 聖弥, 甘利 英一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

今回、3歳代ですでに、先行乳歯の根尖病巣によって、その後継永久歯が位置異常を起こした2症例を経験し、臨床的に興味ある知見が得られたので、処置法と合わせて報告した。症例1は3Y6Mの女児で、罹患歯はAであった。その歯根は1/2吸収し、その吸収端には大きな透過像が見られ、その中に歯冠のみが形成されている[1]が、唇側へ強く傾斜して存在していた。処置：Aを抜歯した。しかし、瘻孔からの浸出液が消失しなかったため、2か月半後に開窓療法を行った結果、[1]は歯冠の殆どが粘膜から露出した。その歯冠の色調は白濁を帯びていたが、歯根が形成されて来ており、周囲組織にも炎症症状が見られなかったため、現在経過観察中である。症例2は3Y9Mの女児であり、罹患歯はAで、両隣接面のう窩と暗褐色の変色が見られた。X線所見では根尖病巣はなかった。以上の所見から、感染根管治療を行い、ビタベックスで根充したところ、根尖より多量に根充剤が溢出した。根充6か月後、溢出した根充剤は消失していたが、歯根は1/2吸収し、その尖端から[1]の全体を包含した境界明瞭な透過像が認められ、[1]は唇側へ著しく傾斜していた。処置：Aの抜歯と同時に開窓療法を行ったところ、ビタベックスが多量に残留していた。術後1年で[1]の周囲の透過像は消失し、歯根の形成も見られた。考察：症例1は早期の積極的な抜歯が、症例2はビタベックス使用時の注意が非常に重要であると思われた。また、2症例の永久歯歯胚は、歯冠のみが形成されていたことから、この段階での位置異常が、早期の処置によってどのように変化するか、経過観察が必要であると思われた。一方、低年齢の先行乳歯の根尖病巣は、後継永久歯歯胚への影響が大であるので、早期

の処置が必要であり、それが、永久歯歯胚のみならず、周囲組織の破壊をも防ぐことが出来るものと思われた。

演題2. 義歯床下粘膜に対するプラークの影響

一義歯洗浄剤を使用した2症例の経時変化について一

○熊谷 英人, 松村 猛, 青木 一,
坂本 由香里, 橋爪 正一, 清野 和夫,
石橋 寛二, 高橋 義和*, 金子 克*

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座

岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座*

義歯に付着するプラークの中の真菌、とくに *Candida albicans* が床下粘膜に及ぼす影響を分析することは、義歯周囲組織の健康維持にとって重要な意義をもつ。今回、義歯性口内炎を有する2症例において、義歯洗浄剤「ピカ」を使用し、その床下粘膜を口腔生体顕微鏡により上皮血管及び染色上皮の変化として経時的に観察するとともに、真菌の同定とインプリント・カルチャー変法により真菌と粘膜組織反応との関連について検討した。

症例1は、レジン床義歯が装着されており、床下粘膜はNewtonの分類でTypeⅢの義歯性口内炎に属していた。義歯洗浄剤使用前、2日目、6日目、13日目の所見を分析した結果、真菌は2日目以降著明に減少し、それに伴い毛細血管形態の単純化と上皮組織の改善が認められ、炎症が軽減した所見を呈した。口蓋粘膜では、歯槽堤粘膜に比較し、治癒が遅れる傾向を示した。それは、口蓋粘膜下に腺組織が存在し、歯槽堤粘膜と組織的差異があることのほか、義歯洗浄剤使用前の炎症程度が強かったことに起因していると考えられた。症例2は、Co-Cr床義歯が装着され、Newtonの分類ではTypeⅡの義歯性口内炎に属していた。義歯洗浄剤使用前及び12週まで各週毎における所見を分析した結果、真菌は3週目以降に著明な減少がみられ